



高知県におけるネギアザミウマの薬剤感受性



写真1 ネギアザミウマ成虫



写真2 ニラえそ条斑病



表 ネギアザミウマの各種薬剤に対する感受性 (2010)

薬剤名	希釈倍数	採集場所					
		香南市	香美市 1	香美市 2	香美市 3	黒潮町 1	黒潮町 2
ジメトエート乳剤	2,000	56	31	25	15	100	100
アグロスリン乳剤	2,000	0	4	30	32	100	92
オンコルマイクロカプセル	2,000	85	76	41	94	100	100
モスピラン水溶剤	4,000	0	9	44	28	74	92
ダントツ水溶剤	2,000	67	52	59	66	98	96
アクタラ顆粒水和剤	2,000	29	6	21	12	95	88
スピノエース顆粒水和剤	10,000	92	100	100	100	95	100
対照の死虫率 (%)		15	24	13	24	11	13

注) 数値は対照を除き補正死虫率 (%)、対照クミテン 5,000 倍による死虫率を示す。

ネギアザミウマ (写真1) は、ニラの重要害虫で、食害による品質低下をもたらすだけでなく、ニラえそ条斑病 (写真2) の病原ウイルスであるアイリスイエロースポットウイルス (IYSV) を媒介します。ネギアザミウマに対しては、これまで主に薬剤による防除がなされてきましたが、近年、薬剤感受性の低下が疑われる事例が認められています。

そこで、2010年に県内の施設栽培ニラ6ほ場で採取したネギアザミウマの主要7薬剤に対する感受性を調査しました。

その結果、スピノエース顆粒水和剤に対しては、補正死虫率がいずれも92%以上と高い感受性を示しました。オンコルマイクロカプセルに対しては、5ほ場の5個体群で76%以上と高い感受性を示しましたが、

香美市の一部では41%と感受性の低い個体群も認められました。

ジメトエート乳剤、アグロスリン乳剤、モスピラン水溶剤、ダントツ水溶剤およびアクタラ顆粒水和剤に対しては、黒潮町から採集した2個体群では74%以上と高感受性を示したのに対し、香美市、香南市から採集した個体群はいずれも67%以下と、感受性の低下がうかがわれました。

このように県内ではスピノエース顆粒水和剤を除く6薬剤に対し、感受性の低いネギアザミウマがみられたことから、薬剤のみでは安定した防除効果が期待できないと考えられます。このため、当センターでは土着天敵の利用など生物的防除法についての研究を進めています。

(昆虫担当 伊藤政雄 088-863-4915)